

Henri Le Sidaner の3つの作品について

—水面上の鏡像のずれと隠しサイン—

雙知 延行*

Notes on three works by Henri Le Sidaner

—From the viewpoints of a gap between the reflected images on the surface of the water and a hidden initials—

Nobuyuki Sochi*

Abstract

In this paper, I pointed out a gap between the reflected images on the surface of the water in the two works that was drawn by Le Sidaner. In addition, I found initials hidden by Le Sidaner.

1. 「鏡像の画家」ル・シダネルについて

アンリ・ル・シダネル (Henri Le Sidaner, 1862-1939) はインド洋のモーリシャス島で生まれたフランス人画家である。ブルターニュ地方に起源をもつ船乗りの家系で、実際に父も祖父も遠洋航路船の船長であった。ル・シダネルはパリに移り、アカデミー派の画家アレクサンドル・カバネルの私塾に入り、時流とともに、印象派、新印象派、象徴主義の影響を受けた。彼は光を描くことを迫及したが、モネなどの印象派の描くさんさんと輝く明るい太陽の光ではなく、昼夜朝の変わり目の一瞬、あるいは月明かりの薄明りなど、微妙な淡い光を描くことにこだわっていたといえる。取材旅行を重ねて多くの風景画を残したが、1900年代の初め頃には、ル・シダネルの生涯において重要な場所となるオーワーズ県のジェルブロー、パリから100kmもない田舎町を見つけて居を構え、多くの風景画等を残している。この頃より、彼は画面に人物を描かなくなり、バラの花々が咲く庭や路地、運河や川沿いの家、石の階段や家の窓、テーブルやイスなどの身近な風景を、多くの場合薄明りの淡い光の中で描いた。人物はどこにも描かれていないが、ほんのすぐ前に人が通り過ぎたかのような気配や、つい今し方まで人がくつろいでいたかのような痕跡を、あるいはそこに家族の団欒を感じさせるような窓の明かりを、その静謐な空間に表現することによって、時間軸の厚みと人の温かみを感じさせることが彼の作品の特徴

であり、身近なものを描くアンティミストと言われている。同時代のアンティミストにはピエール・ボナールやエドゥワール・ヴェイヤールがいる。ル・シダネルは運河や川沿いを描く際に、多くの鏡像を描いていることから「鏡像の画家」と言ってもよいだろう。

2. 月明かりの下の川沿いの家と夕暮の小卓



図1 月明かりの下の川沿いの家

ル・シダネルの1920年の作品に、「月明かりの下の川沿いの家」がある。タイトルには「川沿い」とあるが、これは月明かりの下のヌムールの運河を描いたリトグラフで、ル・シダネルが気に入っていた風景のひとつと思われる。実際に、同一のモチー

フでいくつかの油彩と、リトグラフが描かれている。日本で最初の西洋美術館である大原美術館所蔵で、1921年に描かれた「夕暮の小卓」はヌムールの運河の夕暮れの同じの風景の点描画である。寒色系の色彩でまとめられて、丸くて深く青い地球を感じさせるような安らぎの漂う時空間が流れていて美しい。近年の日本におけるル・シダネルの回顧展においても最も人気のあった作品のひとつであろう。また、1928年発行のカミーユ・モークレールによるル・シダネル研究書の表紙にもこの運河が描かれている。



図2 夕暮の小卓(大原美術館所蔵)

2. 1 水面上の鏡像のずれ

リトグラフ「月明かりの下の川沿いの家」を見ると、運河沿いの家は幾何学的な遠近法に忠実に、ひとつの消失点に向かっていく。しかし、このリトグラフにおいては、水面に映った建物の像は正確な鏡像にはなっていない。向かって左側の手前の家の水面上に映った線が消失点に向かっていない。一方、同じ風景を描いた「夕暮の小卓」では水面に映った像は鏡像になっており、陸上のものと同様に消失点に向かっていく。なぜ同じ風景でこのようなずれが生じたのであろうか。

中退ではあるが美術学校で学び、絵画手法も身に付けていて、さらにひとつのモチーフに習作を重ねていたと思われるル・シダネルが遠近法でつまらぬミスを犯さないだろう。ル・シダネルの絵画手法は、まず、屋外において小さなパネルに油彩で描き、そ

れをアトリエでデッサンにして、その後、格子縞を使ってカンヴァスに転写していたことがわかっている。

「夕暮の小卓」は、まず、現場で下描きされて、その後ジェルブロワのアトリエで色を入れたものが描かれ、ジェルブロワにあるテーブルとイスが描き入れられた。それから再び、二日間ほどヌムールに戻って、ディテイルを確かめて、最後はベルサイユのアトリエで仕上げたことをアンリ・ル・シダネルの曾孫で美術評論家のヤン・ファリノー＝ル・シダネル氏から聞いた。アンリ・ル・シダネルが水面上の鏡像について関心が強かったこともこのとき語られた。

2. 2 水面上の幾何

リトグラフにおける運河の水面が平面で、つまり曲面における接平面で、さらに、運河がゆったりとした流れであったと仮定すると、きれいな鏡像が水面にできることが予測できる。またこのとき、陸上と水面上の消失点がだいたい一致し、水面上においてもデザルグの定理が成り立つ。実際にこの運河の水の流れはゆったりとしていることが、鏡像が大部分において乱れていないことから推測できる。地球は平面ではなくて丸いことから、水面も上に凸の曲面、つまり曲率が0以上の曲面と考えた場合には、凸面鏡の原理より、鏡像のサイズは陸上のものより短くなってしまうことが分かるが、このことから鏡像のずれは説明できない。実際には、水面に映った手前の建物の線が一部だけ長く伸びてしまっているからである。

あるいは、運河が手前の右方向にカーブしはじめていることから、遠心力が働いて水流に差ができて、内回りの方が外回りよりも水かさが減ることにより、カーブに差し掛かった一番手前の建物の最も手前の線が乱れて消失点に向かわなくなったということも考えられる。しかしこのことは、「夕暮の小卓」や「カミーユ・モークレールによるル・シダネル研究書の表紙」にあるこの同一の運河の絵がほぼきれいに鏡像を実現していることに矛盾する。どの絵もこの運河の水かさは同じくらいに描いてある。他の絵画においても、ル・シダネルの描く鏡像は乱れていないものが多い。つまり、ゆったりとした水の流れをル・シダネルは好んで描いている。

このリトグラフの鏡像のずれはル・シダネルの気まぐれの所業だったのであろうか。しかし、人を描かずに人の気配をほのめかすというル・シダネルの手法である「不在の存在感」という点からさらに考えてみると、「月明かりの下の川沿いの家」の風景は、

この運河を運搬船（または水鳥等でも構わない）が通り過ぎた直後の様子ではないかと推測できる。おそらくその瞬間を「鏡像の画家」ル・シダネルは細かく観察していたのであろう。船が運河のカーブを通過した直後に、ほぼ水平だった水面の一部がへこんで凹面鏡になり、手前の建物の最も手前の線の像が乱れて、部分的に間延びした鏡像の姿をリトグラフ「月明かりの下の川沿いの家」に描いたのであろう。凹面鏡の焦点よりも手前に実物がある場合には凹面鏡上の像は平面における像より間延びすることが分かっている。つまり、そのような曲率の凹面鏡がそこに部分的に誕生していたことになる。水面上を船などが通り過ぎると八の字型の発散波ができて、縦波として伝わる。縦波は波の変動が波の進行方向と同じ向きになっていて、上下の振幅もなく、そこに凹面鏡ができたのであろう。横波も船などの進行方向に直角にできるが、石を投げた後に広がる波紋などにも見られる横波は波の変動が波の進行方向と垂直になっていて、この場合は、鏡像が切れ切れに間延びするためにリトグラフの状況とは異なる。横波の影響の少ないところでくぼみのできたのであろう。「夕暮の小卓」にはあえて通過後の様子を描かなかった。「夕暮の小卓」には画面手前にテーブルとイス等を置くことにより、人の気配を感じさせるといふル・シダネルの性分は十分満たされたのだと考えられる。

2. 3 不在という存在の位置づけ

ル・シダネルの作品の中の鏡像を考察するにあたって、他の画家の作品の鏡像もいくつか調べてみた。ヨハネス・フェルメールの「デルフト眺望」、カミーユ・コロドーの「ヴィル・ダヴレー」、ポール・シニャックの「サン＝トロペの港」、ルネ・マグリットの「光の帝国」などなど、風景画には鏡像が多く扱われてきている。新印象派のシニャックの作品には鏡像がたくさん扱われていて、海水の波の揺れによって鏡像が切れ切れに間延びしているものがいくつか点描で描かれていて、上に挙げたフェルメールの「デルフト眺望」も鏡像が間延びしているが、部分的な鏡像のずれを描いたものは見つけることができなかった。

ル・シダネルは鏡像の部分的なずれを描くことによって、画面には人（あるいは水鳥等）をあえて描かないが、存在感やその営みを温かい目線で暗示したのではないだろうか。このリトグラフでは、画面の少し外に存在するであろう運搬船または水鳥等を、ル・シダネルは描かないでその存在を表現したことになると考えられる。シンプルで作為のないものを

好んだ茶の湯の利休が「無作為の作為」で無作為を作為の中に位置づけたの同様に、あるいは、「0の発見」で0が他の自然数と同列に数直線の中に位置づけられたのと同様に、ル・シダネルは部分的な鏡像のずれをリトグラフに描くことによって、この画面における不在を様々な存在の在り方のひとつとして表現し、配置したといえる。

3. アトリエ



図3 アトリエ

フランスのオークションでル・シダネルのデッサンの「アトリエ」を見つけた。彼の居住したジェルプロワに構えたアトリエをクレヨンとパステルで描いたもので1924年頃のものである。この作品はル・シダネルの作品集であるカタログレゾネには記載されておらず、ル・シダネルのサインの記入もない。カタログレゾネの著者でアンリ・ル・シダネルの曾孫でもある美術評論家のヤン・ファリノー＝ル・シダネル氏に問い合わせたところ、ル・シダネルがサインを書かないことはよくあったことと、1931年のベルギーのブリュッセルの展覧会に出品されたという履歴が残っていたことで、この作品がル・シダネルの真筆であることを確認した。

3. 1 隠されたサイン

さらに、デッサンに描かれたアトリエ前方の石畳の道に「LS」とル・シダネルの隠しサインが描かれていることを見つけた。ル・シダネルの他の作品においては、カタログレゾネにおける全作品をチェックした限りでは、隠しサインを見出すことはできなかった。私が照会し得るル・シダネルの作品の中では唯一の隠されたサインであろう。

3. 2 隠しサインの真意とは？

レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」の両眼には、それぞれ「L」と「S」の文字が隠し描かれていて、「L」はレオナルドで「S」は愛人のサライを意味するという真偽のわからない仮説があるが、計らずも偶然にして、ル・シダネルの隠しサイン「LS」を発見した。

ル・シダネルにとって愛着のある居住地であったジェルプロワのアトリエのデッサンにおいて、アトリエの前の道に、そっと自分の名前を刻むあたりは、人物を描かなくなっていたル・シダネルらしい。ル・シダネル自身の「不在の存在感」である。ちょっとした悪戯心だったのかもしれない。通常のサインを記入しなかったことも納得できる。そして、ル・シダネルがまるでそこに立っているかのように夢想させる道であり、アトリエの中のル・シダネルを感じさせてくれる風景である。

このアトリエを2011年夏に訪れた。ル・シダネルの邸宅の敷地内で教会のすぐ隣のこのアトリエは屋根の部分は補修されていたが、ほぼこのデッサンと同じ姿を現在も留めていた。

4. 終わりに

ル・シダネルが居住したジェルプロワは「世界で最も美しい村」のひとつとして知られている。ル・シダネルがこの美しい村に移り住んだのではなく、廃墟が残されたこの町に移り住んで、バラを植えて美しい村を演出したのがル・シダネルだった。つまり、最も美しい村の立役者としてもル・シダネルの名前は知られている。

5. 参考文献

- (1) J. R. ニューマン他「空間についての数学」東京図書株式会社
- (2) 酒井隆「リーマン幾何学」裳華房
- (3) ブルーノ・エルンスト「エッシャーの宇宙」朝日新聞社
- (4) 宮後浩「スケッチパース」秀和システム
- (5) フィービ・マクノートン「錯視芸術 遠近法と視覚の科学」アルケミスト双書
- (6) 「アンリ・ル・シダネル展」図録
- (7) 「印象派とその源流展」図録
- (8) 「大原美術館 1 海外の絵画と彫刻—近代から現代まで—」図録
- (9) 「ひろしま美術館」図録
- (10) マルセル・ブルースト「失われた時を求め

て」集英社文庫

(11) 岡鹿之助「フランスの画家たち」中央公論社

(12) Camille Mauclair, Le Sidaner, éditions Georges Petit, 1928

(13) Yann Farinaux - Le Sidaner, Le Sidaner- L'œuvre peint et gravé, éditions André Sauret, Catalogue Raisonné

(14) Ingrid Mössinger & Karin Sagner, Henri Le Sidaner - Ein magischer Impressionist, Kunstsammlungen Chemnitz